図9. コミュニティセンターakta 総来場者数および初来場者割合の推移(2011年～2013年)

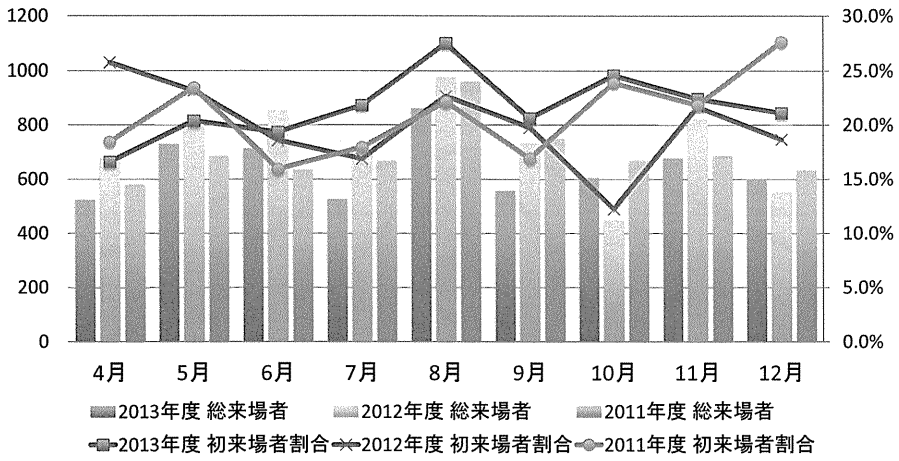


図10.年別 コミュニティセンターakta 来場目的 2011年～13年

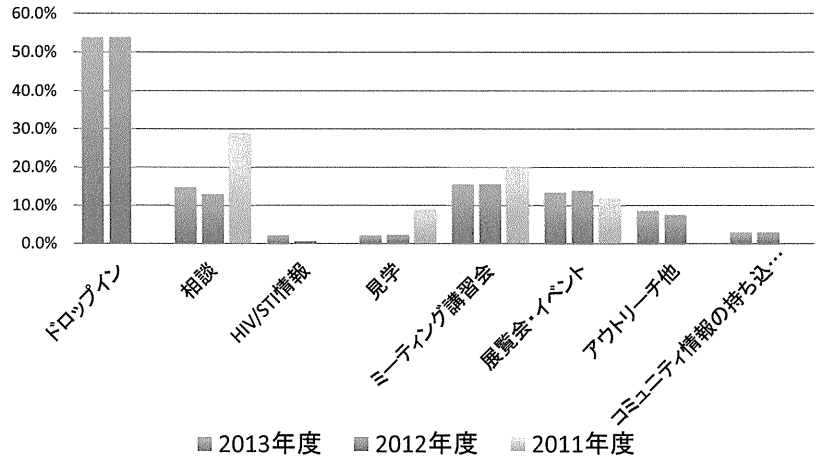
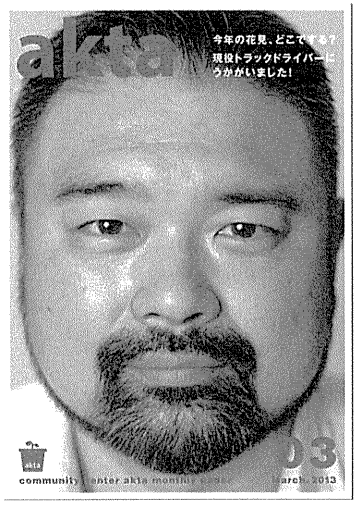


図11.従来のコミュニティペーパーakta (左)と改訂後(右)



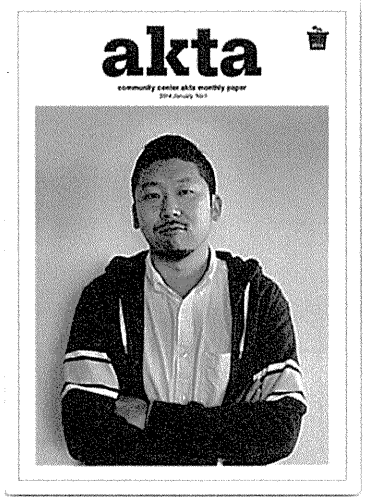
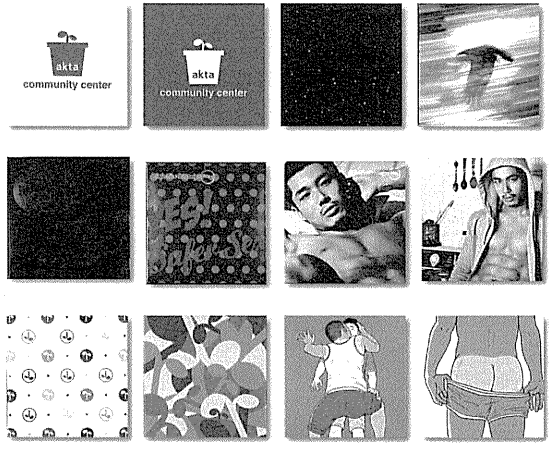


図12. 2011-2013年度作成 TAKE FREE CONDOM



各5,000個制作

図13.

DELIVERY HEALTH PROJECT（アウトリーチ）

バーへ

DELIVERY BOYS

新宿2丁目ゲイバー＆クラブ、毎週金曜日（第3週を除く）

165店舗へ配布。

性風俗店へ

Adult DELIVERY

東京23区内ゲイ向け性風俗店＆ボルノショップ、毎月1回

47店舗へ配布。

関連機関へ

資材発送

MSMを取巻く環境へのメール便・郵送でのアウトリーチ。

行政機関 **18**件
教育機関 **8**件
医療機関 **18**件
研究機関 **3**件
保健所 **46**件
HIV関連NGO **16**件
セクシャリティ関連NGO **5**件
自助グループ **2**件
メディア関連 **9**件
その他 **29**件

合計**154**件

首都圏全域へ

MSM首都圏グループ

渋谷・新橋・上野・浅草のゲイバーへの配布と、訪問による配達を好まない首都圏ゲイバーへの郵送によるアウトリーチ、**85**件へ発送。

ヤローページへ検索情報が掲載された神奈川県、千葉県、埼玉県の保健所、**33**件。

合計**118**店舗

定期的に顔と顔をあわせた配布を行い、街の空気を持ち帰る。

図14.Safer Sex Campaign

プログラムの目的

対象：性風俗店舗

ゲイ向け性風俗店のオーナーやスタッフと信頼関係を構築する。

↓

環境介入の契機を増やす

アウトリーチ（啓発資材の設置）
↓
プログラムの連携、意見交換
↓
自主的な活動の発起を促す

対象：利用者

セーファーセックスをMSMの憧れる“スタイル”へと規範イメージをシフトさせる。

↓

予防行動をとる。

（2012）予防行動に関心を持つ
↓
（2013）予防に必要な知識を習得
↓
（2014）予防につながるコミュニケーションを身につける

14

図15.Safer Sex Campaign

協力店舗のガイドライン

- 利用者がコンドームやローションをより使いやすいような工夫をしていたり、あるいは**今後取り組む意志がある。**
- **違法・脱法ドラッグ**を推奨、販売していない
- **HIV陽性者を排除するような案内**が店内にない。
- キャンペーン終了後も、意見交換を行ったり、引き続きHIVや性感染症予防に関する**自主的な取り組み**を行う意志がある。

※ポスター等資材設置については、協力店をひろげる。

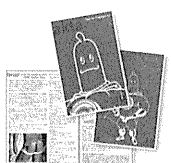
図16.Safer Sex Campaign2012

2012年度：資材の開発・設置・配布

セーファーセックスをスタイリッシュに可視化する

対象：性風俗店舗

啓発 ポスター

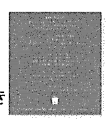


毎月発行しているフリーペーパーも連

バッグ型の資材

＝ ＋

ローション付きコンドーム



メッセージ

対象：ゲイバー、他

広報 ポスター

コンドーム

カードサイズの資材

ゲイコミュニティの中にセーファーセックスを意識化

16

図17.Safer Sex Campaign

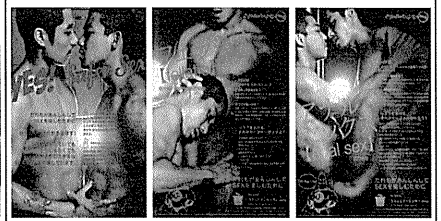
2013年度：資材の開発・設置・配布

具体的な行為を想定した３種類のポスターを中心に構成

イベント広報ポスター

協力：バディ

9/13-「予防」ポスター



キス　フェラチオ　アナルセックス

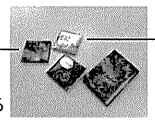
10/4-「検査・サポート」ポスター

MSM向け東京都保健所マップ

9/13- 展覧会
Safer Sex Collection

8/30　トークショー「HIVとセーファーセックス」
講師：行動疫学者 金子典代・バディ編集長 村上ひろし

ハッテン場に設置した
キャンペーンコンドーム
※ローション付き



バーに設置した
キャンペーンコンドーム※２種

予防の情報をまとめた
カードサイズのリーフレット

感染リスクと具体的な予防の知識を発信

17

図18.Safer Sex Campaign 2013

広報

ゲイ向けイベントでのポスター展示

ゲイマガジンでの記事掲載

ゲイ向けイベントにブース出展

18

図19.Living Togetherイベントの実施

HIV/エイズと陽性者の存在のリアリティを可視化し、コミュニティの中の新たなキーパーソンや人気チームと連携することで、若年層と未だ情報の届いていない層への情動的な予防啓発とHIV検査受検を促進する。

akta tag tour（年４回）

- TOKYO RAINBOW WEEK2013（2013/5/6@AiSOTOPELOUNGE)87人
- 新宿２丁目大ゆかた祭り（2013/8/4@AiSOTOPELOUNGE) 68人
- 平成元年会（2013/11/4@AiSOTOPELOUNGE）57人
- 慶応義塾大学三田祭（2013/11/22@慶応義塾大学三田祭）

※2012年からLT Loungeにかわり実施

19

図20.NPO法人aktaと自治体との連携

MSMを対象とした啓発普及のためのTalk Show等の開催（東京都福祉保健局）

東京都福祉保健局委託事業

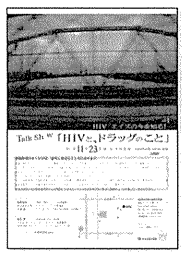
2011年8月20日

8/25-30、韓国釜山で開かれたアジア・太平洋地域のエイズ／ＨＩＶ会議に出席した方達をお招きして、日本の状況を解決するための様々なヒントを、コミュニティのみなさんと探る。

講師：
長谷川博史 / NPO法人JaNP+
じゅんぺい / NPO法人JaNP+
柴田惠 / 非営利団体akta
岩橋恒太 / NPO法人ぷれいす東京

来場者数：**27人**

Vol. 1
2011年11月23日

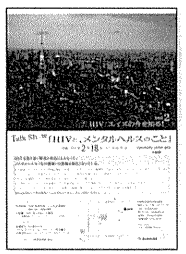


HIVと、ドラッグのこと

講師：
生島嗣 / NPO法人ぷれいす東京
森野嘉郎 / 弁護士
中山まさひろ / アパリクリニック

来場者数：**42人**

Vol. 2
2012年2月18日



HIVと、メンタルヘルスのこと

講師：
平田俊明 / しらかば診療所
矢島嵩 / NPO法人ぷれいす東京

来場者数：**39人**

Vol. 3
2012年3月30日

HIVと、人とのつながり

講師：
小林りょう子 / NPO法人LGBTの家族と友人をつなぐ会
佐藤郁夫 / NPO法人JaNP+、NPO法人ぷれいす東京

来場者数：**45人**

コミュニティと、HIV／エイズに関する問題を共に考える。

図21.ヤロープロジェクト

◉戦略研究終了後、2011年4月からの取り組み

MSM首都圏グループ（NPO法人ぷれいす東京＋NPO法人akta）&厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業MSMのHIV感染対策の企画、実施、評価の体制整備に関する研究班（研究代表者 市川誠一）

MSM対象HIV検査普及啓発・広報

- HIV検査普及のための資材の企画・制作
- 首都圏地域のゲイ向け商業施設へのアウトリーチ

効果評価（厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業 MSMのHIV感染対策の企画、実施、評価の体制整備に関する研究班（研究代表者 市川誠一）との連携による調査・効果評価の実施。）

- ＭＳＭにおける啓発活動の広がりを把握するコミュニティでの質問紙調査
- ＭＳＭの受検促進に協力する保健所での受検者アンケート

検査環境整備および相談支援整備

- エイズ対策事業に関する意見交換会の開催(年２回実施)
  第４回意見交換会（8/7 29人 国立感染症研究所・エイズ研究センター）
- 都県とMSM首都圏グループで実施するMSM対応検査従事者に向けた研修会の実施
- 通常検査・臨時検査検査情報収集
- 支援・相談情報提供　webサイトHIVマップ

HIVマップ

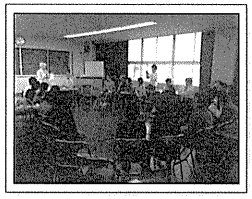
図22.ヤロープロジェクト

保健師（HIV検査担当者）研修会

東京都	神奈川県	千葉県	埼玉県
東京都福祉保健局 健康安全室感染症対策課 エイズ対策係	神奈川県保健福祉局 健康医療部健康危機管理課 感染対策グループ	千葉県保健福祉部 疾病対策課 感染対策室	埼玉県保健医療部 疾病対策課 感染対策担当
●日付：2013年6月21日	●日付：2013年11月1日	●日付：2013年10月22日	●日付：2013年10月4日
●会場：都庁第一庁舎	●会場：横浜市開港記念会館	●会場：市川健康福祉センター	●会場：埼玉県浦和合同庁舎
●参加人数：**22人**	●参加人数：**19人**	●参加人数：**13人**	●参加人数：**13人**

●**プログラム**（コーディネート：生島 嗣／NPO法人ぷれいす東京）

① 開催都県のHIV/エイズ対策
② アイスブレイク
③ 陽性者の手記リーディング(HIVのリアリティの共有)
④ セクシャリティへの理解と求められる配慮
⑤ MSMを対象にした研究結果・成果などから報告
⑥ 検査環境の取り組み事例の紹介と意見交換
⑦ セクシャリティに配慮した 模擬対応
⑨ 相談・支援に役立つリソース紹介/akta見学



●**アンケート**（神奈川県）

- **性的な話題への抵抗感** → 研修を通して、性的な話題への抵抗感を感じる人が少なくなった。
- **身近にMSMがいるという意識** → 研修を通して、身近にMSMがいる意識が高まる傾向が見られた。
- **HIV陽性者の相談も他の相談者同様に対応できるか** → 研修を通して、対応する自信をつけた人が増えた。

MSMへの理解を深め、MSMが安心して検査を受けられる環境整備

図23.ヤロープロジェクト

啓発資材の施設掲載基準

◉ 検査施設ガイドライン

1.都県とMSM首都圏グループで実施するMSM対応検査従事者に向けた研修会への参加
2.エイズ対策・HIV検査普及に関する意見交換会への参加
3.施設でのMSM首都圏グループの資材活用
4.検査結果(陽性/陰性)の伝え方の確認

◉ 掲載施設数(2013年11月発行分)

- 東京都　18施設→19
- 神奈川県　20施設→22
- 千葉県　8施設→8
- 埼玉県　10施設→14

※ウェブサイトHIVマップ「あんしん検査サーチ」もこれに準ずる。

◉ 商業施設掲載ガイドライン

1.『ヤローページ』等、HIVや性の健康に関する情報グッズの設置に協力する。
2.MSM首都圏グループが企画・編集する『ヤローページ』への、店舗情報の掲載を希望する。
3.違法・脱法ドラッグの利用を禁止している。
4.違法・脱法ドラッグの販売を行っていない。

◉ 掲載店舗数(2013年11月発行分)

地域：新宿、上野、浅草、新橋、渋谷、横浜、千葉、さいたまなど

1.バー　244店舗→252
2.性風俗店　23店舗→22

2011年度は出版社から店舗情報を購入し掲載。 → 2012年度からコミュニティセンターのネットワークを活かし、店舗情報を直接収集・掲載。

図24.ヤロープロジェクト

HIV検査普及のための冊子の企画・制作

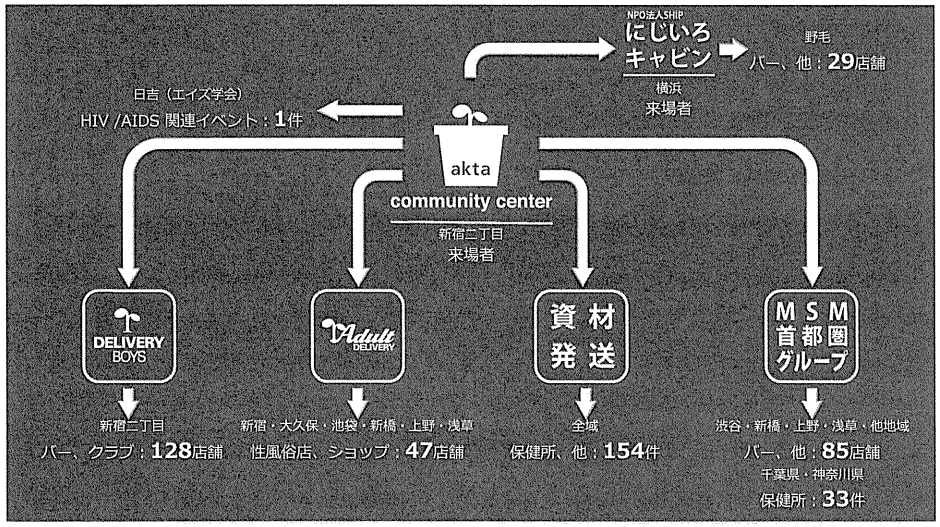
- 地域情報 ─ HIV検査施設 / MSM向け商業施設
- 訪問記 ─ HIV検査施設 / MSM向け商業施設
- HIV/エイズの基礎・最新情報
  HIV/エイズ関連の支援情報
- セーファーセックス情報

ヤローページ＝ゲイスポット情報＋HIV検査施設情報（基礎情報含む）

保健所などでの臨時検査が集中する６月・12月にあわせて、
MSM層に訴求力のある検査情報資材を作成し、HIV検査のイメージを一新する事で、
ゲイライフの中に受検行動を位置づける。

図25.ヤロープロジェクト

首都圏全域へのアウトリーチ（ex.2012年度）



477ヶ所へのアウトリーチ、コミュニティセンターと477ヶ所からの発

図26.Webサイト HIVマップ トップページ

厚生労働科学研究費補助金　エイズ対策研究事業(総合研究報告書)
MSMのHIV感染対策の企画、実施、評価の体制整備に関する研究事業

東海地域のMSMにおけるHIV感染対策の企画と実施

研究分担者：内海眞（独立行政法人国立病院機構東名古屋病院　院長）
研究協力者：石田敏彦、藤浦裕二、石塚茂（Angel Life Nagoya; ALN）勝水健吾（Secret Base）
金子典代、塩野徳史、市川誠一（名古屋市立大学看護学部）

研究要旨

我々は2000年4月にMSMのCommunity Based Organization（以下、CBO）であるAngel Life Nagoya（以下、ALN）と名古屋医療センター（旧国立名古屋病院）の医療者からなる協働組織を作り、MSMを対象にしたHIV感染予防活動を開始し、2002年から当研究班に所属した。これまでの活動は、コミュニティセンターの運営、啓発活動、無料HIV検査会の実施、関係団体との連携構築、調査研究の5分野で実施された。2011年度から2013年度における活動とその評価の概要は以下の通りである。

1. コミュニティセンターriseの運営

コミュニティセンターriseの運営は、従来ALN単独で実施してきたが、2011年からは予防啓発に関わるグループの代表や個人からなる運営委員会を組織し、その協議のもとに運営することとした。また、来場者誘致のために開場時間の拡大やイベントの誘致を実施した結果、来場者数は年々増加した。

2. 予防啓発活動

啓発用コンドームを毎月、コミュニティペーパーHANAを年4回、名古屋市のゲイ向け商業施設とイベント会場に配布した。2001年から継続している啓発イベントNLGR+（Nagoya Lesbian & Gay Revolution Plus）を6月の第一土日に開催してきた。本啓発イベントは従来ALNが中心でボランテイアを募って実施してきたが、2011年からは有志からなる実行委員会で実施した。

3. 無料HIV検査会の実施

毎年夏と冬にゲイ向けの無料HIV検査会を実施した。夏はNLGR+に併設した。夏の検査会の受検者数（括弧内はHIV陽性者数）は2011年から順に，254名（4名）、281名（4名）、408名（11名）で、冬の名古屋での検査会は同様に106名（2名）、94名（2名）、104名（0名）であり、冬の岐阜での検査会は順に24名（1名）、23名（1名）、36名（1名）であった。検査会の前に電話とメールによる相談期間を設け、研修を受けた担当者による事前検査相談を実施した。

4. 関係団体との連携構築

連携団体：HIV陽性者支援団体Secret Base、セクシャルマイノリティ支援団体NPO法人PROUD LIFE、薬物使用者支援団体NPO法人三重ダルク、名古屋のHIV/AIDS啓発団体WADN（World AIDS Day in Nagoya）、名古屋市、愛知県、岐阜県、名古屋医療センター。

5. 調査研究

愛知県内保健所の受検者調査と東海地区在住のMSMを対象としたインターネット調査－GCQアンケートーでは、ALNの啓発資材が受検促進に働いたが、行動変容には繋がらなかった。名古屋医療センター並びに愛知県のデータではAIDS発症者が漸減しており、ALNの活動には一定の有効

性が存在した。

A. 研究目的

我が国の HIV 感染症/AIDS の新規発生動向は、必ずしも望ましい方向へ向かっているとは言えない。新規 HIV 感染者とエイズ患者の合計数は 2008 年をピークにその後は横ばいとなり、2012 年には両者とも減少に転じているように見えるが、2013 年の第二四半期では HIV 感染者数歴代 2 位、エイズ患者数歴代 1 位、合計数も歴代 1 位で楽観視はまだ許されていない状況下にある。感染者患者の大部分は MSM で占められており、MSM を対象とした HIV 予防啓発活動はさらなる改善を迫られている。

この 3 年間 HIV 感染症/AIDS の予防啓発を目的として、Angel Life Nagoya (以下、ALN) を中心に新たな施策も導入して各種活動を実施すると共に、その活動の評価も行った。

この 3 年間の活動の内容は、以下の 5 つの分野に分けられる。即ち、1. コミュニティセンターrise の運営、2. 予防啓発活動、3. 無料 HIV 検査会の実施、4. 関係団体との連携構築、5. 調査研究の 5 分野である。本報告では、上記 5 分野の方法とその成果について記述すると共に、若干の考察を行った。

B. 研究方法

1. コミュニティセンターrise の運営

コミュニティセンターrise (以下、rise) への来場者を増加させ、彼らに HIV 関連情報に接する機会を与えることを目的に rise の運営を行った。2011 年にはそれまで ALN 単独で rise を運営してきたが、以後は HIV 予防啓発に関わるグループ (NGO、大学、病院など) の代表や個人からなる十数名の運営委員会を組織し、運営の基本はその協議に委ねることとした。次いで、開場時間を拡大し、各種イベントやサークル活動を誘致するとともに、関連団体の会議の場として利用してもらうよう工夫した。上記効果を年間の来場者数の変遷によって判定した。

2. 予防啓発活動

啓発用コンドームを作成し、名古屋市内のゲイバー、ハッテン場には毎月配布すると共に、イベントの際や検査会の受検者にも配布した。

コミュニティペーパーHANA を年 4 回発行し、上記商業施設とイベントの際に配布した。
また、検査会の受検者にも配布した。

2001 年から継続しているゲイによるゲイのための啓発イベント NLGR を毎年 6 月の第一土曜日の午後から日曜日の夕方に亘って開催した。従来 ALN がボランテイアを募って主催していたが、2011 年からは有志からなる実行委員会を組織し、名称を NLGR+と変更して実施した。各種ゲイ向けの商業施設の協力を得て、HIV 関連情報の発信と、同時に行われる無料 HIV 検査会への参加呼びかけを主たる目的として実施した。

3. 無料 HIV 検査会の実施

毎年夏と冬にゲイ向けの無料 HIV 検査会を実施した。夏は上記 NLGR+に併設し、2011 年、2012 年はイベント会場の池田公園から地下鉄で 4 駅離れている千種保健所で、2013 年は池田公園から徒歩 10 分の中保健所で実施した。冬は千種保健所 (M 検 in Nagoya) と JR 岐阜駅ビルの一室 (M 検 in Gifu) を借りて実施した。NLGR+併設検査会と冬の M 検 in Nagoya は名古屋市と名古屋医療センターが主体となって実施され、ALN は広報とボランティア募集並びに研修を担当した。M 検 in Gifu は岐阜県主催で、ALN はやはり広報を担当した。これまでの調査から WEB による広報が有用であることが判明したので、WEB による広報に力を入れた。また、これらの検査会に先立って事前の電話やメールによる検査前

相談をriseで実施した。相談担当者は事前に検査に関する研修を受けた者に限った。

4.関係団体との連携構築

HIV 予防啓発に関わっている諸団体と連携をとった。連携によって、検査会のスムースな運営、広報活動の拡がり、riseへの来場者の増加、相談事業の強化などを期待した。

5.調査研究

この3年間に各種調査が行われた。それらを列挙すると以下の通りである。

1) ALNの活動と名古屋医療センターにおける新規HIV陽性MSMの動向との関係調査

2) NLGR 来場者のゲイ・バイセクシャル男性に対するアンケート調査とその経年変化

3)愛知県や名古屋市の保健所でHIV検査を受けた受検者を対象とした受検者の特性に関する調査

4)各地域のMSMを対象にしたインターネット横断調査とパネル調査－GCQ アンケート－（予防啓発活動の介入評価）

5) HIV抗体検査の受検者を対象にした質問紙調査

ALN の予防啓発活動の介入効果を上記調査の 1) 3) 4) から判定した。また、愛知県における新規HIV感染者/AIDS患者数の動向とALNの活動との関係を推論した。

C.研究結果

1.コミュニティセンターriseの運営

rise の開場時間の変遷は以下の通りである。2011 年までの開場時間は、木/金曜日が20時から23時、土曜日が16時から22時、日曜日が14時から20時の週18時間であったが、2012年からは火曜日の18時から22時を加えた。連携している陽性者支援団体であるSecret Base が陽性者限定のピアミーティングやメール相談を実施している。陽性者の視点から見たHIV予防活動への提案が得られた。また、2013年度からは月曜日の18時から21時も開場し、開場時間は現在週25時間に増えている。

現在 rise に誘致されているイベントやミーティングは以下の通りである。

JOINT：20 代や名古屋市へのニューカマーを対象にした友達作りを目的とするイベントで毎月1回開催している。参加者は5名から20名であった。

・手話教室：月2回開催
・僕らのゲイライフプロジェクト：月1回開催
・展覧会：適宜開催
・フラワーアレンジメント：適宜開催
・ライフプランニング：適宜開催
・WADN、GID PROUD、ダルクのミーティングが定期的に開催されている。

以上の結果、来場者数は2011年以降年々増加した。毎年の4月から12月までの9ヶ月間における来場者数の比較では、2011年から順に1,522名、1,885名、2,261名と順調に増加した。

2.啓発活動

1) 啓発用コンドームの配布

毎月ゲイバーとハッテン場に配布すると共に、イベントや無料HIV検査会の際に配布した。ゲイバーの軒数は時期によって異なるが、31軒から39軒（全体の約2/3をカバー）で、ハッテン場は2軒であった。2013年度はゲイバーに毎月381個から668個を配布し、ハッテン場には合計8,620個（10ヶ月間）配布した。ゲイ向けの商業施設でのコンドームの消費率は9割を超えた。イベントでは1回につき約300個を4回配布し、無料HIV検査会では1,536個配布した。

2) コミュニティペーパーHANAの配布

年4回発行し、毎回3,000部をゲイ向け商業施設、イベント会場、検査会で配布した。HANAの内容は、ゲイコミュニティの商業施設

の案内や地下鉄の時間表、HIV 関連情報や検査案内とちょっとしたエッセイなどで、表紙には名古屋在住のキーパーソンを起用した。

3) NLGR+の開催

ゲイによるゲイのためのイベントを毎年開催した。日程は原則として6月の第一土曜日の午後から日曜日の夕方とした。参加者は毎回ほぼ延べ4,000人に昇った。

3.無料HIV検査会の開催

毎年夏と冬にゲイ向けの無料HIV検査会を実施した。夏は NLGR+に併設した。夏の検査会の受検者数（括弧内はHIV陽性者数とその割合）は2011年から順に,254名(4名;1.6%)、281名（4名；1.4%)、408名（11名；2.7%）で、冬の名古屋での検査会（M検 in Nagoya）は同様に106名（2名；1.9%)、94名（2名；2.1%)、104名（0名；0%）であった。冬の岐阜での検査会(M検 in Gifu)の受検者数(括弧内はHIV陽性者数とその割合）は年代順に24名（1名；4.2%)、23名（1名；4.3%)、36名（1名；2.8%）であった。検査会に先立ち、事前の電話とメールによる検査相談期間を設け、研修を受けた担当者による相談をriseにおいて実施した。

4.関係団体との連携構築

予防啓発活動の質の向上と視野の拡大を目指し、関係諸団体との連携を構築した。連携を構築した団体の名称と連携の内容は以下の通りである。

1) Secret Base：名古屋におけるHIV陽性者支援団体である。予防啓発活動や検査会の受検促進においては、常に当事者支援団体との連携が不可欠となる。2012年4月からriseでピアミーティングやメール相談を実施した。HIV陽性者の参加は0人から7人であった。また、Secret Baseはriseの運営委員会のメンバーでもある。

2) NPO法人PROUD LIFE：セクシャルマイノリティ全般を対象にして活動している名古屋のNPO法人である。昨年4月からriseにおいて電話相談事業を行っている。

3) NPO法人三重ダルク：近年薬物使用が切っ掛けでHIV感染に至るMSMのケースが増えている。そのために、薬物使用に対する知識の修得と薬物依存症からの脱却を支援する必要性が生じてきた。2012年6月と11月の2回に亘り我々と三重ダルクとの情報交換を行った。

4) WADN：10年前から名古屋地区を中心に活動しているグループで、HIV感染症/AIDSの予防啓発に関係している10数個の団体で構成される。10年前に設立され、12月のエイズデーのパレードや講演会を主催すると共に、名古屋の高校生全般を対象にしたサマーセミナーでの講演や NLGR+でのブースに出展している。WADNの定期的な会議の場をriseが提供している。

5) 名古屋市健康福祉局健康部保健医療課：2001年に我々が始めたNLGRに併設した無料HIV検査会と4年前に始めたM検 in Nagoyaは、2009年から名古屋市の委託事業となっている。しかし、事業を実質的に支えるのは従来通りALNと名古屋医療センターの医療者であり、それは現在においても変わりない。ALNの役割としては、広報、検査前相談事業、ボランテイアの獲得および研修などが中心となる。また、名古屋市から委託事業費の提供を受け、啓発資材の一部をそれに充てている。

6) 愛知県健康福祉部：愛知県のエイズ対策会議委員としてALNの代表が出席している。また、NLGR+でのブース出展を通して、MSMの愛知県内保健所におけるHIV検査を呼びかけた。さらに、愛知県からALNは委託事業を受け、検査案内などの資材の作成に充てている。

7) 岐阜県健康福祉部：我々が始めた無料HIV検査会を倣い、3年前から岐阜県でも12月のエイズデー近くの日程を選択し、ゲイ向けの無料 HIV 検査を実施することが決定され、

我々が全面的に支援することとなった。その結果については前項で述べた通りである。

8) 国立病院機構名古屋医療センター：元々名古屋地区のMSMを対象にしたHIV予防啓発活動は、ALNと名古屋医療センターの医療者からなる緩い協働組織を作ることによって始まった。従って、医療センターとの関係は一体化とは言わないまでも密な関係が構築されている。特に無料HIV検査会の企画、実施、反省は絶えず医療センターと共に行ってきた。また、名古屋医療センターにおける新規HIV陽性者の動向は我々の活動の反省を促し今後の方向性を示唆してくれる。

5. 調査研究

主に5つの調査研究が行われたが、そのうち我々の活動の評価に繋がるものは3つである。

名古屋医療センターにおける新規HIV陽性MSMの動向を見ると、2009年においては43.4%と極めて高い数値であったが、その後減少に転じ（2011年度報告を参照）、2013年のデータでは新規HIV陽性者139名のうちAIDS発症者は44例の31.9%と減少していた。

愛知県下の16保健所におけるHIV抗体検査の受検者を対象とした質問紙調査が2012年度と2013年度に行われた（2012年度および2013年度報告を参照）。いずれにおいても啓発資材への接触経験のある人々の再受検率が高かった。

GCQアンケート（有効回答363名）においても、啓発資材への接触が受検促進作用を有することが判明したが、セーファーセックスへの行動変容には繋がっていない実態が明らかにされた。

愛知県健康福祉部健康担当局健康対策課の結核・感染症グループが愛知県におけるHIV感染症/AIDS発生動向を報告している。それによれば、2010年、2011年、2012年の新規HIV陽性者数（括弧内はエイズ発症者%）は順に138名(41%)、126名(40%)、119名(34%)と陽性者数とAIDS発症者割合共に減少傾向にあることが判明した。この統計データから計算したエイズ発症者の絶対値は、順に57名、50名、40名と激減していた。

D. 考察

我々は2000年4月にMSMのCBOであるALNと名古屋医療センター（旧国立名古屋病院）の医療者からなる協働組織を作り、MSMを対象にしたHIV感染予防啓発活動を開始し、現在に至っている。これまでの活動は、コミュニティセンターの運営、予防啓発活動、無料HIV検査会の実施、関係団体との連携構築、調査研究の5分野で実施されてきており、この3年間の活動もほぼ同じ分野でなされてきた。

riseの運営は2010年度まではALN単独で行われてきたが、2011年度からは予防啓発に関係するNGO（Secret Base、HIVと人権情報センター、PROID LIFEなど）、大学、病院の代表や関心を有する個人からなる十数人の運営委員会を組織し、その協議のもとに運営を進める態勢に変更した。多くの人々の智恵を結集したいためである。その効果がイベントの開催やHIV陽性者の来場に繋がり、3年間にriseへの来場者は大幅に増加した。また、活動の中にHIV陽性者の視点が導入され、活動の質も向上したものと考えられる。

コンドームの配布はALNが担当した。少ないメンバーにもかかわらず、この活動は2000年から現在まで途絶えることなく継続されている。毎月1回バー、ショップ、ハッテン場に出向き新しいコンドームを配布している。バーが中心になるが、閉店や新規オープンなどがあるのでその軒数は時期によって異なるものの、ほぼ全体のバーの数の2/3をカバーした。但し、中高年層をターゲットとするゲイバーへのコンドーム配布は困難な状況が続いている。

コミュニティペーパーHANA もコンドームの配布に合わせて商業施設を中心に配っている。コミュニティにより親しまれ話題となる啓発資材となるように、表紙のモデルに名古屋の GOGO ボーイやゲイバーのマスターでもあるドラァグクイーンを起用した。これが関心の低かったゲイバーのマスターの理解を得ることに繋がると共に、マスターからバーの利用者への積極的な配布にも繋がった。

コンドームや HANA などの啓発資材への接触が受検促進作用を有することが、保健所の受検者を対象にした調査やインターネット調査でも明らかになり、地味な活動ではあるが今後も工夫をしながら啓発資材の配布は継続していかねばならないと考える。

NLGR は 2001 年より ALN が主催してきたが、2011 年より有志による実行委員会形式に変更し、名称も NLGR+に改名した。有志の中には NGO のメンバーやゲイ向けの商業施設のオーナーあるいは純粋に個人としての参加者もいる。もちろん ALN もそのメンバーとして活動の大きな一翼を担ってきた。毎年原則として 6 月の第一土曜日の午後に開始し、翌日の日曜日の夕方まで継続するもので、ゲイによるゲイのためのイベントとして定着した感がある。ゲイ向けの商業施設の協力も大きく、関連団体のブースも十数個出展されている。メイン会場である名古屋市栄の池田公園ではステージが用意され、各種催し物の中に HIV 関連情報の提供、HIV 陽性者のトークショウや検査案内も加えて、HIV 感染症/AIDS への関心を引き出し、検査の重要性を認識してもらうと共に、陽性者への偏見を出来るだけなくす努力も合わせて行ってきた。NLGR+の開催を通して、参加者が自然な形で上記目標を理解することを望んでいる。

検査会は NLGR+に併設した夏のものとイベントに併設しない冬の検査会の 2 種類を開催してきた。冬は名古屋の千種保健所で開催する M 検 in Nagoya と、JR 岐阜駅のビル内で実施する M 検 in Gifu との 2 つがある。夏と冬に名古屋で行われるものは名古屋市が予算立てするもので、市と名古屋医療センター並びに広報やボランティアの確保と研修を担当する ALN の 3 グループの協働で実施してきた。一方、M 検 in Gifu は岐阜県が主催するもので、ALN は検査会のノウハウを提供すると共に広報を担当した。MSM を対象にした無料 HIV 検査会は 2001 年に ALN と名古屋医療センターが NLGR に併設して開始したもので、その実績が認められた結果 2008 年から名古屋市が予算を計上する事になった経緯がある。岐阜県も同じように 3 年前に実施するようになった。2013 年の NLGR+併設の検査会受検者数が飛躍的に増加しているのは、それ以前はイベント会場から地下鉄で 4 駅離れた千種保健所を検査会場にしていたのに対し、2013 年に中保健所が池田公園から徒歩 10 分の中区役所内に移転したのでそこを検査会場に設定したためである。つまり、イベント会場に近い検査会場の設定による利便性の向上が受検者増に繋がったと考えられる。今後も受検者の増加を目指し、工夫を加えていかねばならない。

この検査会で HIV 陽性と診断された人々はほぼ全員医療機関に紹介され、治療に繋げられた。治療により AIDS 発症を免れ、且つこれまでの生活が保証されるので、ゲイ向け検査会による新規 HIV 陽性の診断は意義あるものと思われる。また、以前の本研究班での研究により、検査会における新規診断の費用対効果は保健所におけるものよりも 3 倍効率的であることが判明しており、今後も継続していく価値のあるものと考える。さらに、検査会においては検査前と後のカウンセリングが必ず実施されると共に、啓発コンドームや HIV 関連情報誌（保健所検査の案内も含む）も手渡され、啓発活動の一環としても意味あるものと考える。

また、多くのボランテイアの参加なしではこの検査会は成立しないが、若いボランティ

アの参加は彼らにとってもHIV関連情報の習得とセクシャルマイノリティに対する理解に繋がり、その波及効果は大なるものがあると信ずる。

2001年に開始された本検査会は、当初は完全に自主的なもので、すべてのボランティアは手弁当での参加であった。その後本研究班の事業となった後に地方自治体の事業へと拡大していった。検査会を義務的な行事として認識するのではなく、いつも最初の精神に立ち返り、社会的ニーズに応える検査会であることを再確認して検査会に臨みたいものである。

この3年間にいくつかのHIV関連団体と連携を成立させた。それぞれの団体は独自の視点と活動歴を有するが、我々の活動にとっても視野の拡大と活動の質的向上に役立ってきた。その結果として、rise入場者の増加と検査会受検者の増加に繋がったと考えられる。今後とも連携を拡大していくと共に、連携の内容を深めて行く努力を継続していきたい。

我々のこれまでの活動がどの程度の意味と価値を有したかについては、本来は第3者機関に判定してもらわなければならない問題であろう。しかし、研究班の内部での調査もこの問題に対してある程度の回答を与えてくれる。愛知県内保健所のHIV抗体検査の受検者を対象にした質問紙調査と東海地域在住のMSMを対象としたインターネット調査－GCQアンケートーでも、啓発資材に接触した人々のHIV検査の再受検率が高く、受検促進にポジティブな効果を発揮していることが判明した。かつ、GCQアンケートでは資材に接触した年齢層は25歳から39歳のALNが対象としているMSMに高く、この意味でもALNの活動も一定の成果を挙げていると言えよう。しかし、コンドーム使用の向上には繋がっておらず、さらなる改善が必要であろう。

名古屋医療センターのデータでは毎年の新規AIDS患者の割合は2009年がピークの43.4%であったが、それ以後漸減し、2013年には31.9%まで減少した。愛知県のデータでも、2010年に41%であった新規AIDS患者の割合は2012年には34%に減少している。新規HIV陽性者数も減少しているので、新規AIDS患者の発生数は激減していることになる。予防啓発活動が成功すれば、検査が推進されるのでHIV感染者の数は増加しても早期発見に繋がるのでAIDS患者数の減少に結びつくはずである。2009年度まではAIDS患者数の減少傾向は認められなかったが、名古屋医療センターのデータでも愛知県のデータでもその後は減少しており、この数年間では明らかにALNの活動の成果が出てきたと推論してもよいだろう。

ALNの予防啓発のターゲットになっている層の多くは、ゲイ向けの商業施設を利用する20台後半から40台半ばと考えられる。高年齢層へのアプローチは現在のところ未だ十分ではない。名古屋医療センターの新規AIDS発症者の大半は40代以上の高年齢層であるので、今後はALNが現在カバーしていない層への予防啓発が必要になろう。

E. 論文発表等

（論文発表）

1. 塩野徳史，金子典代，市川誠一，山本政弘，健山正男，内海眞，木村哲，生島嗣，鬼塚哲郎：MSM (Men who have sex with men) におけるHIV抗体検査受検行動と受検意図の促進要因に関する研究，日本公衆衛生学雑誌，60(10)，639-650，2013

（学会発表）

1. 金子典代，塩野徳史，健山正男，山本政弘，鬼塚哲郎，内海眞，伊藤俊弘，岩橋恒太，市川誠一：MSM向けインターネット横断調査に続く追跡パネル調査法の妥当性の検討，第27回日本エイズ学会学術集会・総会，熊本市，2013
2. 町登志雄，木南拓也，藤浦裕二，牧園祐也，

塩野徳史,市川誠一：ゲイ・バイセクシュアル男性を対象としたアウトリーチ-アウトリーチ・マニュアル作成を通じて-,第26回日本エイズ学会学術集会・総会,横浜市,2012

3. A.Shingae, N.Kaneko, S.Shiono, S.Ichikawa, M.Utsumi :HIV Testing among MSM Attending Community-based HIV Testing Events in Nagoya, Japan from 2008 to 2010, The 10th International Congress on AIDS in Asia and the Pacific (ICAAP), Busan, Korea, 2011
4. 吉澤繁行,塩野徳史,新ヶ江章友,金子典代,コーナ ジェーン,市川誠一,石田敏彦,藤浦裕二,真野新也,内海眞：名古屋の無料HIV 抗体検査会を併設した屋外イベント NLGR 来場者における来場経験別 HIV 抗体検査受検経験率とコンドーム常用率,第 25 回日本エイズ学会学術集会・総会,東京,2011
5. 塩野徳史,新ヶ江章友,金子典代,市川誠一,山本正弘,健山正男,内海眞,生島嗣,鬼塚哲郎：ゲイ向け商業施設利用者対象の質問紙調査による地域別予防啓発事業の評価に関する研究, 第25回日本エイズ学会学術集会・総会, 東京,2011

厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業(総合研究報告書)
MSMのHIV感染対策の企画、実施、評価の体制整備に関する研究

近畿地域のMSMにおけるHIV感染対策の企画と実施

分担研究者：鬼塚哲郎（京都産業大学文化学部　教授）
研究協力者：辻宏幸、後藤大輔、町登志雄、中村文昭（公益財団法人エイズ予防財団）、内田優、有田匡、大畑泰次郎（MASH大阪）、日高庸晴（宝塚大学看護学部）、塩野徳史、金子典代、市川誠一（名古屋市立大学看護学部）

研究要旨

平成23～25（2011～2013）年度、MASH大阪は以下のような研究事業を実施した：

1. 以下の一次予防関連プログラムを執行した：

1）コミュニティレベルのプログラムとして：①月刊のコミュニティペーパー〈SaL+〉（以下〈SaL+〉）の発行を継続して行った。平成21（2009）年度より、エイズ予防/セクシュアルヘルス関連情報を前面に押し出す方式を採用したが、本研究期間中も同様の方針を継続した。平成23年4月～26年1月の期間に、月平均188店舗および43団体に21.8名のボランティアが6,442部を配布した。本研究で実施した介入評価調査の結果、〈SaL+〉読者層は非読者層と比較して、HIV/STIや検査についてより正しい知識を持ち、HIV/STIについて困った時に相談できる友人・団体をより多く知っており、HIV/STIの予防により積極的であることが明らかとなった；②平成24（2012）年11月に中高年MSM層向け季刊コミュニティペーパー〈南界堂通信〉を創刊し、以後3ヵ月おきに発行した。期間中、平均22名のボランティアが197店舗に1,716部を配布した。あらたに新世界地区の複数の商業施設にも配布可能となり、〈SaL+〉より一段と広いクライアント層を獲得しつつある。

2）グループ・個人レベルのプログラムとして：①コミュニティスペース〈dista＞（以下、dista）関連事業を執行した。平成23年4月～26年1月の期間に、月平均628.8名が来場、うち成果の指標である初来場者数は月平均60.3名、期間全体で2,128名であった。カフェイベント、教室、展覧会が頻繁に開催され、相談件数は月平均31.8件であった。②STI勉強会を執行した。毎月趣向を変え、工夫を凝らして開催したが、参加者は平均4.9名に止まった。③若年層ネットワーク構築支援プログラム〈Step〉を随時開催、3年間で総計381名が参加、うち35名がdistaを新規に利用した。

2. 二次予防関連プログラムとして、①〈クリニック検査キャンペーン〉を3年間に渡り実施し、MSMが安心して受診できるクリニックでの検査機会を提供した。3年間で950名のMSMが受検し、うち29名が陽性とわかった。陽性者の受検者総数に占める割合は3.1％であった。②平成23（2011）年度に〈ゲイナイトでの郵送検査キット配布プログラム〉を実施した。1,420名の来場者のうち、278名が検査キットを受け取り、うち100名が実際に検査を受け、うち5名が陽性と分かった。陽性者の割合は高かったものの、医療機関につながったかどうかを確認することが困難だったことから、受検促進プログラムのモデル構築には至らなかった。③平成24（2012）年度に〈クリニックでHIV＆梅毒検査受けてみるキャンペーン〉を実施したが、受検者が少なく、受検促進プログラムのモデル構築には至らなかった。④大阪府および大阪市と協働し、保健所検査に携わる保健師

との情報共有・意見交換を目的に〈プロフェッショナル・ミーティング(PM)〉を期間中に3回開催した。担当者間の情報共有を集中的に行なったことで、地域MSMにおけるHIV感染対策を進展させるうえで成果があった。

3. 三次予防プログラムとして、①コミュニティセンター来場者のうちHIV陽性者に向けて相談サービスを提供した。②NPO法人CHARMがHIV陽性者に提供するプログラム〈HIVサポートライン関西〉〈ひよっこクラブ〉に関して、広報の面で協働した。
4. アドボカシイ事業として、京都府、大阪府、大阪市、兵庫県に対して各種提言を行なった。
5. 上記介入プログラムの効果評価ツールとして、コミュニティネットワークを用いたMSMを対象とする性の健康、HIV/AIDS感染予防行動に関する質問紙調査－GCQアンケートーを実施した。また、全国8都府県の保健所においてHIV抗体検査の受検者を対象とした質問紙調査を行い、大阪府の調査結果をMASH大阪介入プログラムの効果評価に使用した。

A. 研究目的

本研究の目的は、平成23～25（2011～2013）年度に執行された研究事業を記述・分析し、効果評価と照合することで、個別施策層向け予防介入事業のモデル構築を試みるところにある。

B. 研究対象と方法

本研究の対象は平成23～25（2011～2013）年度にMASH大阪によって執行された予防介入プログラムであり、後述する効果評価の結果と比較検討したうえで考察を加える。

C. 研究結果

1. 一次予防関連プログラム

予防啓発関連のプログラムの実施状況について報告する。

1)コミュニティペーパー〈SaL+〉

（これまでの流れ）

平成12～14（2000～2002）年度に実施した臨時検査イベント〈SWITCH〉を通して得られた情報をコミュニティに還元するツールとして構想されたコミュニティペーパー〈SaL+〉（サルポジ、以下、〈SaL+〉）は、平成15（2003）年度にはコミュニティペーパー的性格を強めつつ浸透、平成16（2004）年度実施したクラブ調査の結果、ベースラインと比較して関連知識、受検行動、予防行動のいずれにおいても、受取り群には非受取り群と比較して有意な効果がもたされた。

（プログラムの目的）

①HIV感染予防およびセクシュアルヘルスの推進に関してMASH大阪が把握している情報をコミュニティに還元することで、読者層にコミュニティへの帰属意識を涵養し、予防・検査・ケアへの行動変容を促す。

②配布活動を通じて、コミュニティとのネットワークを構築する。

（事業の展開）

平成21（2009）年度にエイズ予防・セクシュアルヘルス関連情報を前面に押し出す方式を採用し、本研究期間中もそれを踏襲した。

（配布実績）

平成23～25（2011～2013）年度の配布実績を表1に示した。

表1. 2011～2013年度における〈SaL+〉の配布実績

年度	*店舗数（月平均）*	*団体数（月平均）*	*配布部数（月平均）*	*ボラのべ数（月平均）*
2011	192店舗	42団体	6,668部	17.5名
2012	184店舗	42団体	6,293部	24名
2013	187店舗	45団体	6,365部	21名
合計	188店舗	43団体	6,442部	20.8名

（効果評価）

平成23～25（2011～2013）年度に実施した調査の結果、HIV予防に関する知識・行動・意識と<SaL+>接触の有無との関連について以下のような結論を得た：

① <選べる!!STI検査1,000円キャンペーン>受検者アンケートの結果、<SaL+>認知率は2011年度61％、2012年度46～58％、2013年度59％であった。

② 2013年度に実施したGCQアンケートの結果、認知率は65.3％であった。しかしながら年齢別にみると、40歳以上の回答者における認知率が73.9％であったのに対し、35-39歳で81.1％、30-34歳で75.5％、25-29歳で61.3％、24歳以下50.2％と、若年層になるほど認知率が下降する傾向が見られた。このことは、<SaL+>のターゲット層と実際に読んでいる層の間にミスマッチが生じていることを示唆している。

③ 保健所での抗体検査を受検したMSM中の認知率は21.8％であった。

以上から、ゲイタウン利用層における<SaL+>の認知は、平成20～22（2008～2010）年度クラブ調査時の水準とほぼ同じ水準であり、ほぼ飽和状態に達していると考えられるが、ターゲット層には必ずしも届いていないことが分かった。この背景としては、若年層の活字離れが考えられる。また保健所受検者調査結果からは、<SaL+>認知層は非認知層に比べて、結婚している割合が低く、HIV/STIや検査についてより正しい知識を持ち、HIV/STIについて困った時に相談できる友人・団体をより多く知っており、HIV/STIの予防により積極的であることが明らかとなった。

2)中高年MSM向けコミュニティペーパー<南界堂通信>の開発と配布

（これまでの流れ）

大阪地域においては平成19（2007）年度以降、エイズ発症後に陽性と分かる中高年MSMが急増、平成22（2010）年大阪府におけるエイズ患者報告数のうち40歳以上が占める割合は56％であった。このことは、中高年MSM層における予防啓発および検査のニーズが極めて大きいことを示唆している。MASH大阪ではミドルエイジ・プロジェクトを立ち上げ、中高年MSM層向け予防啓発紙媒体とニーズ調査を行い、平成22（2010）年度にゲイタウン商業施設オーナー＆従業員向けの<男とセックスする男のためのAIDS &LIFEガイドブック―ミドルエイジ編―>を発行した。平成23（2011）年度からは新たな定期刊行物（季刊）発行準備のため、ボランティアで構成する編集局を組織、平成24（2012）年11月に<南界堂通信>創刊号を発行した。

（目的）

HIV 抗体検査受検のニーズ、早期治療のニーズが極めて高い大阪地域の 40 歳以上の中高年 MSM 層に向けて必要な情報を提供し、予防行動、受検行動を促す。

（方法）

ターゲット層とほぼ同じ年齢層のボランティアで編集チームを組織した。資材は定期的に発行し（当面は季刊）、継続的にターゲット層のエイズ関連情報へのアクセスを促進させる。ここでいう中高年層とは 40 歳以上を指すが、特に 40 歳代、50 歳代 MSM をメインのターゲットとする。

これまでの調査や活動実績から、中高年 MSM にはエイズの知識のみを前面に押し出す資材は手に取ってもらえないことが分かっており、予防啓発関連情報だけでなく、MSM 関連の教養、セクシュアルヘルス、ライフスタイルに目配りした情報を提供することで、この先も健やかで充実した人生を送れるようなライフプランを提供しつつ、予防行動、受検行動の促進につなげることを編集方針とした。

（結果）

<南界堂通信>の配布実績を表 2 に示した。

表 2. 2011～2013 年度における〈南界堂通信〉の配布実績

年度	号	店舗数（月平均）	配布部数（月平均）	ボランのべ数（月平均）
2012	創刊号 第 2 号	199 店舗	1,628 部	23 名
2013	第 3 号 第 4 号 第 5 号 第 6 号	195 店舗	1,804 部	21 名
合計		197 店舗	1,716 部	22 名

これまで〈SaL+〉の配布には消極的であった新世界地区の複数の商業施設が、〈南界堂通信〉の配布に協力した。その理由は、中高年 MSM 向け資材であること、字が大きく読みやすいこと、の 2 点であった。

（効果評価）

平成24（2012）年11月に創刊号、以後3ヶ月毎に平均195店舗と45団体に配布した。利用者から「字が大きくて読みやすい」「中高年向け資材の発行を待っていた」などの声が寄せられた。新たにプログラムの担当者を置き内容の拡充と体制の強化を行った。記事内容に医者や医療従事者へのインタビューや、地域の歴史、中高年特有の疾患などに合わせて、エイズ関連の情報を掲載している。

各種調査のデータはまだ少ないが、2013年度に実施した〈選べる!!STI検査1000円キャンペーン〉受検者アンケートの結果では、〈南界堂通信〉の認知率はまだ12%に止まるが、コミュニティベースで実施した調査GCQアンケートでは、年齢別にみると24歳以下8.7%、25-29歳で10.6%、30-34歳で10.6%、35-39歳で13.4%、40歳以上20.1%であり、ターゲット層に届いていることが示唆された。

3）コミュニティスペース〈dista〉

（これまでの流れ）

MASH 大阪が運営するコミュニティスペース〈dista〉（以下、dista）が開設されたのは平成 14（2002）年。翌平成 15（2003）年度からエイズ予防財団の委託事業と位置付けられた。平成 21（2009）年度から施設は国の事業として維持・管理され、MASH 大阪がプログラムを運営する体制となった。

（機能および目的）

(1)予防啓発プログラムを戦略的に展開するための拠点。(2) コミュニティメンバーがふらっと立ち寄り、セクシュアルヘルスやコミュニティ関連の情報に接触する情報センター。(3) コミュニティメンバーに向けての交流・文化・啓発プログラムが執行されるコミュニティセンター。

（対象クライアント）

ゲイ関連施設従業員、ゲイ関連施設利用者、インターネット利用者、エイズ対策関連団体・個人の 4 者を想定している。

（相談体制）

平成 22（2010）年度から月一回のペースで運営ミーティングを開催、相談事例についての情報共有を通じて相談サービスの質の向上をはかってきた。

（到達目標）

以下のような到達目標を平成 23（2011）年度初頭に設定した：

(1) dista の認知率を 70%に引き上げる。

(2) 新規来場者数を月平均 100 名に引き上げる。

表 3. 2011～2013 年度の dista の利用状況

年度	総来場者数（月平均）	新規来場者数（月平均）	イベント開催状況
2011	610.9 名	63.5 名	・週末ｶﾌｪｲﾍﾞﾝﾄ（6 種） ・教室（手話、韓国語、中国語、ｱｰﾄ） ・展覧会　ほか
2012	637.8 名	58.3 名	・週末ｶﾌｪｲﾍﾞﾝﾄ（6 種） ・教室（手話、韓国語、中国語、ｱｰﾄ、障害者支援　他） ・展覧会
2013	637.8 名	59.1 名	・週末ｶﾌｪｲﾍﾞﾝﾄ（6 種） ・教室（手話、韓国語、中国語、ｱｰﾄ、障害者支援　他） ・展覧会（3 件）
総数	22,644 名	2,171 名	

（効果評価）

認知率については、①<選べる!!STI検査1000円キャンペーン>受検者アンケートの結果、dista認知率は平成23（2011）年度72%、平成24（2012）年度66～72%、平成25（2013）年度63%であった。②平成25（2013）年度に実施したGCQアンケートの結果、認知率は50.6%であった。年齢別にみると24歳以下35.2%、25-29歳で48.1%、30-34歳で61.1%、35-39歳で69.2%、40歳以上53.8%であり、30代の認知率が最も高かった。認知率については、目標はほぼ達成されたといえる。

(2)MASH 大阪では新規来場者数をコミュニティセンター事業の効果評価の指標と捉えており、新規来場者数を月平均100名に引き上げるという到達目標を設定したが、この目標は達成されなかった。3 年間の新規来場者総数は1,794名（平成25年11月末現在）であり、堂山地区商業施設利用層のうち14人に1人がこの3年間にdistaを訪れていることになる。

4)STI 勉強会

（これまでの流れ）

STI勉強会とは、エロネタや恋愛ネタを中心に身近で興味をひくようなテーマを設定し、一義的で啓発色の強いメッセージを発信するのではなく、自らの言葉で意見、情報を交換し、多様な性や生活のあり方を認め合い、その雰囲気を共有するものである。自分達にとってのSEXを考え、語ることにより、SEXに対する興味や意識を喚起し、SEXと密接な関係にある性感染症に対する認識を促すことを目的とする。

（方法）

実施手法として以下の点が挙げられる。①リラックスできる場づくりのため、カフェ形式を採用し、ファシリテーターを設け対話形式で展開する。②プログラム最後に15分程度、STIやセーファーセックスを意識するような仕掛けを設ける。③広報として<SaL+>やdista.bでの告知、SNS等を用いた。

（成果）

本研究期間中は、予算の削減に伴い、平成21（2009）年度までのような専属ボランティアスタッフによる運営体制を構築できず、不十分な体制による運営となったこともあり、プログラムの質は維持されたものの、参加者は大幅に減少した。

プログラムの実施状況を表4に示した。

表4. 2011～2013年度におけるSTI勉強会の実施状況

年度	*参加者数（月平均）*	*新規参加者数（月平均）*	*企画タイトル例*
2011	6.3名	3.3名	・初めての☆☆ ・HIVについて
2012	4.2名	3.5名	・My ｺﾝﾄﾞｰﾑを探そう！ ・STI体験談
2013（2014年1月まで）	4.3名	2.4名	・My ﾛｰｼｮﾝを見つけよう ・梅毒について

5)若年層ネットワーク構築支援プログラム<Step>

（目的）

コミュニティにあまりアクセスしていない10代～20代の若者をターゲットとしたプログラム。プログラムの目的として、①コミュニティや、MASH大阪に未接触の若者に対する入り口となる事；②参加者がdistaへアクセスするようになる事；③他のプログラムへのボランティア・リクルートになる事、があげられる。

（方法）

事業は以下の点に留意しつつ展開した。①啓発色を前面に出さず、季節感やお得感、遊びに行く、楽しむ、友達作りなどの企画を実施する。②distaへアクセスするきっかけを提供する。③SNS（ソーシャルネットワークサービス）を中心とした広報宣伝を行う。④プログラムに関わるスタッフの友人の中であまりSTI

の情報に触れていないクライアントの参加を促進させる。⑤企画運営は主にコミュニティの若者が中心に行う。

（成果）

本プログラムも〈STI 勉強会〉と同様、予算の削減のため充分な体制で運営することが困難となった。その結果、参加者数、コミュニティセンター来場につながった数のいずれも減少した（表 5）。特に後者は、平成 20～22（2008～2010）年度と比較して 124 名から 35 名に大幅に減少した。

表 5. 2011～2013 年度における〈Step〉の参加状況

年度	*参加者数（実施回数）*	*新規参加者数*	*dista 流入数の内、新規来場者数*
2011	129 名（5 回）	38 名	12 名
2012	80 名（4 回）	25 名	4 名
2013	172 名（11 回）	25 名	19 名
合計	381 名（20 回）	88 名	35 名

6）相談

相談事業の年次別推移を表6に示した。

表6. 2011～2013年度における相談事業の実施状況

年度	*件数(月平均)*	*内容*	*備考*
2011	16.2件	A群：26% B群：70% C群： 4%	A群：HIV関連 B群：ｾｯｸｽ、人間関係、ﾗｲﾌｽﾃｰｼﾞ、依存 ほか C群： その他
2012	42.3件	A群：19% B群：79% C群： 2%	
2013	37.0件	A群：31% B群：66% C群： 3%	
合計	31.8件 相談総数805件		

2. 二次予防関連プログラム

1）クリニック検査キャンペーン

（これまでの流れ）

MASH 大阪では、阪神圏地域の HIV 抗体検査体制の整備と拡大をはかるため、平成 19（2007）年度に大阪府立公衆衛生研究所および大阪 STI 研究会と連携して本プログラムを立ち上げ、MSM が心理的・物理的にアクセスしやすい検査場を創出することで検査機会の大幅な向上を目指した。平成 19～22（2007～2010）年度の実績を表 7 に示した。

表 7. 2007～2010 年度における
クリニック検査キャンペーンの実績

年度	*提携ｸﾘﾆｯｸ数（検査項目）*	*期間*	*受検者数*	*陽性者数（陽性率）*
2007	3ヵ所 (HIV, HBV, 梅毒)	2ヵ月	28 名	4名 (14.3%)
2008	7ヵ所 (HIV, HBV, 梅毒)	1.5月	17 名	1名 (5.9%)
2009	7ヵ所 (HIV, HBV, 梅毒, HCV, 淋菌, ｸﾗﾐｼﾞｱ)	8ヵ月	272 名	12名 (4.4%)
2010	7ヵ所 (HIV, HBV, 梅毒, HCV, ｸﾗﾐｼﾞｱ)	8ヵ月	263 名	15名 (5.7%)

平成 21～22（2009～2010）年度においては、MSM の受検機会の拡充および安心して行けるクリニックの周知という 2 つの目的が達成された。この実績をふまえ、本研究においても、研究を継続し、MSM 向け二次予防推進のための研究モデル事業として展開した。

（目的）

診療所・クリニックを活用し、MSM に対して、彼らが受検しやすい HIV/STI 検査受検機会を提供することにより、エイズ発症に至ってから自分が HIV 感染していることに気づく人を減少させ、ひいては HIV/STI の感染拡大を抑止することに寄与することを目指す。

（方法）

(1) 本プログラムを理解し、協力の得られる診療所・クリニックを開拓した。協力診療所・クリニックによって、通常検査もしくは 迅速検査のいずれかを選択できる。

(2) MASH 大阪はフライヤー、ポスター、ホームページ、twitter、ハッテン場ロッカー、各種 SNS などを利用し、1,000 円の自己負

担でHIV/STI検査が受けられることを広報する。平成23～24(2011～2012)年度はハッテン場ロッカーにマグネット資材を貼り付ける体制を構築し、実施した。

(3)検査前後の不安へのサポートとして、①dista、②CHARM・HIV サポートライン関西（電話）が相談対応にあたる。

(4)受検者には、採血後に調査票アンケート（診療所・クリニックで回収）に記入してもらう。

（成果）

2011年度から2013年度の実績を表8に示した。

表8. 2011～2013年度における
クリニック検査キャンペーンの実績

年度（財源）	*提携クリニック（検査項目）*	*期間*	*受検者数*	*陽性者数（%）*
2011（エイズ予防財団委託事業）	7ヵ所（4ヵ所:通常検査（HIV,HBV,梅毒,HCV,ｸﾗﾐｼﾞｱ）3ヵ所：即日検査（HIV,HBV,梅毒,HCV））	3ヵ月	189名	6名（3.2%）
2012（①エイズ予防財団委託事業、②大阪府委託事業）	7ヵ所（4ヵ所:通常検査（HIV,HBV,梅毒,HCV,ｸﾗﾐｼﾞｱ）3ヵ所:即日検査（HIV,HBV,梅毒,HCV））	① 3ヵ月	235名（通常52、迅速183）	6名（2.6%）
		② 3ヵ月	202名（通常49、迅速153）	10名（5.0%）
2013（大阪府委託事業）	8ヵ所（4ヵ所:通常検査（HIV,HBV,梅毒,HCV,ｸﾗﾐｼﾞｱ）4ヵ所:即日検査（HIV,HBV,梅毒,HCV））	① 2ヵ月	222名（通常68、迅速154）	6名（2.7%）
		② 3ヵ月	102名（通常25、迅速77）(2014年1月末現在速報値)	1名（0.9%）
合計	8ヵ所（4ヵ所:通常検査（HIV,HBV,梅毒,HCV,ｸﾗﾐｼﾞｱ）4ヵ所:即日検査（HIV,HBV,梅毒,HCV））	14ヵ月	950名（2014年1月末現在速報値）	29名（3.1%）

本プログラムにより、3年間で950人のMSMが性感染症クリニックで受検し、うち29人が陽性と分かった（2014年1月末現在）。受検者に占める陽性者の割合は3.3%であり、検査ニーズの高い層に届いたプログラムであった（同時期の保健所検査における陽性者の割合は0.1%前後であった）。

大阪地域のすべてのハッテン場のすべてのロッカーに資材が設置されるという状況を創出することができた。協力施設のロッカー数は計1,346個であった。

クリニック・診療所の医師から陽性結果を受け取った時に資材をもらったことにより、陽性の人のためのサービスやプログラムを知り、利用するに至った人がいることが確認された。本キャンペーンをきっかけに、クリニック・診療所と地域サービスの連携が強化されてきていることが示唆された。

2)ゲイナイトでの郵送検査キット配布プログラム

（目的）

我が国最大級のゲイナイト・イベント〈NUDE〉の会場の一部を利用し、一次予防・二次予防のプログラムを組み合わせた〈club THIRD〉を実施し、普段HIV/AIDSに関心を持たない、もしくは検査に行きにくい環境にあるMSMに対し予防啓発のメッセージとともに受検行動を促進する。

（方法）

①会場にHIV/STI予防啓発のための展示を行なった；②郵送検査の限界とデメリットを確認した来場者に対し、郵送検査キットを配布した。

（結果）

〈NUDE〉に参加した1,420名のうち278名（19.5%）に検査キットを配布した。実際に検査キットを利用したMSMは100名、うち陽性割合は5%であった。

（成果）

受検ニーズの高い層に検査機会を提供したことは評価されるが、医療機関につながった